

## 心が育つということ その(1)

### 幼児の持つ「内—外」意識の 変容をめぐって

豊田 一秀



人は常に、何かに包まれていなくてはならない存在であると、私は思う。胎児は、包まれていた胞衣（エナ）によって、「内」を得ていたと考えた場合、その胞衣を、宇宙にまで拡大すること、換言すれば、各人の「内」を自ら広く育てていくことが、人が活（い）きて成長していくことであるとは言えないだろうか。

おそらく、人生の中で最も居心地の良い家であったであろう、母親の胎内から産み出された新生児は、外界において、一個の生命体として、呼吸をし、食事をとり、排泄をし、寒暖の変化に耐えていかなければならない。もはや、彼はそれまで包まれていたものを失ったのである。出産を精神的な「捨子体験」であると見る見方も、ここから由来している。

さて、新生児を最初に包むのは、一般には、母親である。母親は、新生児を出来るだけ心地好い状態に置くよう、最大の配慮をする。

一方で、新生児も、母親を自分の方に引き寄せるべく、能動的に母親に働きかけることが、次々に明らかに

なってきた。例えば、エリクソン（一九七二）は、このことについて以下のように述べている。「新生児は、確かに物理的環境を支配する何物をも持っていないが、その表情や反応で、成人の注意をひき、自己の欲求を満たさせ、新生児の健全な成長を見守る人の関心をひきおこさせ、また、新生児の面倒をみさせることによって積極的な養育熱を更に刺激する。」また、ポウルビィ（一九六九）は、愛着人物の選択過程について述べる中で、「他の刺激より優先して、ある種類の刺激へ定位し、注視し、聞く、という（乳児の持つ）内在的傾向、この傾向によって、非常に幼い幼児は、自分を世話する人に特別な注意を払うようになる。」と説明している。

この一連の、母親と乳児の相互交流の中から、乳児は、生後一五―一七週で、母親を愛着対象とみなすようになる。乳児は、母親に包まれる中で、母親を自分の「内なる存在」として、他の人物と弁別するようになるのである。乳児はここに、最初の安全基地を得たと言える。

この事実は、幼児期においては、例えば、次のような形で表れ、変化をみる。

母親のスカートを握ったまま、片時も離れられなかった子どもが、あるとき、スカートから手を離せるようになり、やがて一人で外に出られるようになる。子どもは忍耐と努力、そして訓練とによって、親から離れられるようになったわけではない。手にスカートの手触りがなれを感じつつも、スカートから手を離していても、それを掴んでいた時の気持ちを感じるようになり、また、一人で外に行っても、傍らに母親がいた時の安心感を維持できるようにする。すなわち、子どもが、自分を自らで支えられるようになるには、子どもの中の心の中で、外界の見え方に対する内的な変化が起こる必要があるのではないかと、そして、それが結果として行動の変化に現れたとは考えられないだろうか。

内なるものを広げていくこと、すなわち、自分を包むものを胞衣から、宇宙にまで広げていく過程の中に、私は人の成長をみていることについて、前述した。このこ

とを、異なった言い方で補うならば、人は常に何かに支えられている必要がある、その支えを多様化していくと同時に、支えを外在的なものから、内在的なものに移行していく過程が、人の成長であるのではないかと述べてもよいであらう。

ここでは、幼児が未知な空間、モノ、人物、といった外界を、内なるものに変容させていくためには、どのような要素、条件を必要としているのか、また、その際に、大人はどのような形で幼児を援助することが可能なのかについて、数回に渡って考察してみたい。

### (1) マージナル (marginal) と「う」

幼児は成長と共に、外界に対する認知を深めてゆく。

これは、空間、時間、生物（人間も含む）、物質など、幼児を取り巻くあらゆるものが、それぞれに持つ違い（多様性）について、幼児が区別出来るようになってくるといってもある。幼児の示す人見知り（心を許した内なる人と、そうでない人）、偏食（慣れ親しんだ食

べ物と、そうでない物）などは、幼児がこの違いを内、外、として認知し区別していることを現わしている。

しかし、この認知は、時と共に変容してくる。幼児のこの、内、外意識の変容を考えた場合、その過程において、両者を橋渡しし、結びつけるものの介在を必要とする場合が多い。それは、ある時には人間であり、物質であり、空間であり、そして時間であったりするのである。この広義における介在物が、ときどきにあって、子どもを支えるのである。私はこの介在物を「マージナルなもの」と位置付けたい。マージナルとは、こうしてみると「内」と「外」を統合する「のりしろ」であると言えよう。

本節においては、マージナルな空間、時間、モノ（人間）という順序に添って考察を加えてみたい。（モノに関しては次回に掲載）

### (2) マージナルな空間 ベランダという空間

〈事例 1-1〉

年長組の子どもが六、七人、三歳児の部屋に遊びに  
来ている。そして、三歳児の部屋に備えつけてある積  
み木や、遊具でダイナミックに遊んでいる。この動き  
の大きな遊びが、この部屋を活気あるものとしている  
半面、三歳児は、五歳児に自分たちの遊びの空間、お  
もちゃ、そして、なによりもリズムを奪われて、三歳  
児のつくる、彼ららしい雰囲気が失われている。何人  
かの三歳児は、年上の子どもたちとの遊びを楽しんで  
はいるが、他の子どもたちは、年上の子どもたちの遊  
びを傍観している。小雨のため、教師は外で遊ぶこと  
を禁止していたが、活発な子どもたちは、それにもか  
かわらず外に出ていってしまう。そのような状況の中  
で、RとSは、二人して何をするでもなく、部屋から  
出てベランダに座っている。(Y保育園)

活発な子どもたちが外に出てしまったのも、室内に彼  
らの遊ぶ場所がなかったことを思うと、その行動も理解  
できるように私には思える。一方、RとSにとって、室

内での喧噪に身を置くことも、また外に出て遊ぶこと  
も、その時の彼らの気持ちにはそぐわないのだ。二人は  
ベランダに座っているだけで、会話を楽しんでいるわけ  
ではない。しかし、積極的に友人に働きかけてゆくタイ  
プではない、くち数の少ないRとSが、おそらく同じ気  
持ちでその場に座っているであろうことが、私には察せ  
られる。この場合、ベランダは外(園庭)と、内(部  
屋)の境界に位置付く「場」である。ベランダは屋根の  
ある外であり、同時に外の開放感をもった内でもある。

室内で年上の子どもたちと遊ぶことも、または外で活発  
な子どもたちと遊ぶことも、どちらも気持ちとして馴染  
まない、その時の二人には、このマージナルな場にたた  
ずむ事が似合っている。違った言い方をするならば、こ  
のマージナルな空間が、その時の二人を救っているとも  
言えよう。施設におけるマージナルな空間としては、ベ  
ランダの他に、廊下などが考えられるであろう。これら  
の空間は、その時々の子どものたちによって選択される貴  
重な空間である。一方、教師の側から見れば、子ど

も、がどの空間を選びとったかを見ることで、その時の子どもの気持ちをある程度、察する事も可能であろう。

(3) マージナルな時間 降園の時、目覚めの時

〈事例 1—2〉

同じ宿舎の人の運転で、AとBは保育園から帰って来る。車から降りると、Bはカバンと帽子をポイッと投げ捨て、道で遊び始める。その事をいくら注意しても全く耳を貸さない。結局は、親が片付けることになる。Aもカバンを親に持たせ、自分では持とうとしな  
い。(家庭にて)

〈事例 1—3〉

Aは、朝、目覚めた時、近くに母親がいないと知ると「お母ちゃまー、こっちに来ーてー！」とヒステリックに叫ぶ。母親が「今、顔を洗っているのよ、すぐ行くわ」と答えても、Aは同じことをキーキー声で、オウムがえしに繰り返す。その後の朝食の時も、

Aは自分から食べようとはせず、「食べさせてー！」  
と言う。(家庭にて)

〈事例 1—2〉も〈事例 1—3〉も、共に子どもが、その活動世界を移した直後の不安定な時の出来事である。

〈事例 1—2〉は保育園から自分の家に帰った直後の事であり、〈事例 1—3〉は目覚めの時、すなわち、夢の世界から現実の世界へ戻った直後の不安定な時の事である。子どもにとって、そこが、実際にはみなれたはずの身近な場であっても、そこに身を移した直後には、その場を内なる世界とすべく、自分を再調整しなくてはならない時もあるようだ。この、自分をその世界に再調整するという仕事は、子どもにとって、なかなか難しいこととあって、大人の手助けを必要とする事も多い。前述の事例においては、子どもたちは、親に依存的になることで、その世界に対してコントロール感を持ち、結果として、内なる世界にしようとする努力している。しかし、大人の目から見ると、この子どもの状態は、子どもが本当

は出来ることを自分でしようとしていない状態と見え易いので、大方の場合、クセになっては大変、という大人のしつけ感覚を刺激して、子どもへの反応をネガティブなものにしている場合が多い。実際の場面において、このような時には、全て子どもの言うなりになる必要があるなどと、私は述べるものではないが、自らの置かれた世界を調整しようとしている、こうした子どもの一つの努力を、大人は心のかたすみで読み取った上で、その子どもに対処するゆとりが必要であると思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

### 参考文献

- (1) Bowlby, J., 1969 "Attachment and Loss, Vol. 1 attachment". The Hogarth Press. (黒田実郎他訳一九八〇 母子関係の理論①愛着行動 岩崎学術出版社)
- (2) Bowlby, J., 1973 "Attachment and Loss, Vol. 2 Separation : Anxiety and Anger" The Hogarth Press. (黒田実郎他訳一九八二 母子関係の理論②分離不

安 岩崎学術出版社)

(3) Erikson, E. H., 1950 "Childhood and Society",

W. W. Norton, N. Y.

(仁科弥生訳一九七七 幼児期と社会Ⅰ みすず書

房)

(仁科弥生訳一九八〇 幼児期と社会Ⅱ みすず書

房)

(4) Erikson, E. H., 1964 "Insight and Responsibility",

W. W. Norton, N. Y.

(鑪幹八郎訳一九七一 責任と洞察 誠信書房)

※ この原稿は、一九八五年提出の修士論文の一部に、

加筆・修正を加えたものである。